



# ぼくの驚嘆すべき 素晴らしい左脳

[ブザーが鳴って7  
(前篇)]

3月31日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

### 3月31日のおはなし「ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳[ブザーが鳴って7(前篇)]」

---

ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳のことを書いておこう。

ぼくには生まれつき並外れて素晴らしい左脳がついていて、並外れた働きをし続けてくれた。そしてこの50年近くぼくを支えてきてくれた。そのことはどんなに感謝しても感謝しきれないと思っている。親にも感謝しているし、空の上の方にいる誰かさんにも感謝しているし、左脳そのものにも感謝している。

ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳がどんな風に驚嘆すべきで、どんな風に素晴らしかったか。うまく伝えられるかどうか自信はないが、できるだけ誰にもわかりやすい形で紹介したいと思う。こんなにも快適なお天気で、こんなにも爽やかな風が吹きぬけているのだから、ぼくだっていつもよりずっと親切にフレンドリーになろうってものだ。

誰でも予想できる通り、ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳は目にしたすべての文字情報を記憶できた。読んだ本は全て読んだ通りにインプットできたし、街を歩きながら目にした看板の文字などもすべて記憶できた。表札の文字などもことごとく記憶できたので、ぼくは自分の家から駅までの間に誰が住んでいるかすべてそらんじることができた。引越したり、土地を分割して売り払って一軒の家が四軒ほどに分譲されたり、そんな異動があっても、過去に遡って再現することもできた。

試したことはないから、これはあくまでも仮説だが、もしぼくが新聞を百年分とか読破したら、歩く記事検索データベースになることだってできたと思う。ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳には限界などないように思われた。よく、人間の脳みそはどんなに使っていてもせいぜい10%程度だといわれるが、おそらくぼくの脳は残りの90%も上手に活用していたのだろう。

学生の頃、劇団に入ってしばらく役者をやっていた。役者としては全然ダメだった。けれど、ことセリフを入れることに関してははずば抜けていた。みんながどうして苦勞しているのかさっぱりわからなかった。なぜならぼくは台本を渡されて一度読んだら、もうインプット完了だからだ。自分のセリフだけでなく共演者のセリフもト書きも何から何まで全部覚えることができた。ただぼくはそれをアウトプットすることが恐ろしく下手で、つまり役者としては全然使い物にならなかった。

暗記が通用する科目の試験勉強で苦勞することは全くなかったし、一般に「応用」と呼ばれるタイプのものでさえ、記憶能力とその組合せによってカバーできないものはほとんどないので、ぼくにとって試験というのは恐ろしく無意味な時間つぶしでしかなかった。中学生くらいまでは、だから何の努力もせずにぶっちぎりの成績を収め続けた。けれどあまりの無意味さに、どんどん意欲が削がれてしまい、教科書や参考図書そのものを読まなくなってしまったので、学生時代

の末期、ぼくの成績は惨憺たるものだった。インプットしなければ、アウトプットはできないのだ。

でも学校の成績なんて何の問題でもなかった。

ぼくは、ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳の力を使ってありとあらゆる文章表現を吸収し、適切な時に適切なフレーズを引き出し、あるいは組み合わせることができた。次から次に大量なサンプルを提示することができた。人はそれを感心してくれ、言葉を考えて欲しいと依頼してくれた。こうしてぼくは広告の文案を書く仕事につけたのだ。適切な時に適切なフレーズを引き出すトレーニングを積んだことで、ぼくは日常においてもとても気の利いたことを言う人と見なされるようになった。単なる組合せなんだけどね。

やがてぼくはどんな言葉を与えられても、それに付随する様々なフレーズを引っ張り出し、それらを並べ替えたり組み合わせたりすることで、いろいろなおはなしを作ることにもできるようになった。短いコピーではなく、それなりのボリュームのあるおはなしを、だ。コツをつかむまで最初のうちは少々苦勞したが、じきにそれも簡単にできるようになり、ぼくは次から次へと物語を生み出せるようになり、それを親しい相手にプレゼントするのを趣味にした。

そうそう。

女の子を口説くのにも何の苦勞もいらなかった。

適切な言葉を適切なタイミングで耳元にささやけばどんな結果だって引き出すことができた。実際に何人かにやってみたのだが、ぼくは言葉だけで女の子をいかせてしまうことだってできた。生きていくことはあまりにたやすく、ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳さえあればそこには何の障害もないように思えた。

けれど、これまた誰もが予想できる通り、ある時期を境にして、ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳はその能力を失い始めた。自分ではそんなことはないと思っていたのだが、今日、それをまざまざと思い知らされた。というか、たったいまこの瞬間、まさにそれを思い知らされている。遅めのランチを食べるために入った飲食店で、席に着き注文しようとメニューを見た。そしていまぼくの目の前にあるのはメニューに書かれたこんな言葉だ。

「あなたの夢が成就する！開運！！生クリーム占い2011年版」

これは料理の名前なのか？ それとも料理とは別なサービスなのか？ 店から客へのメッセージなのか？ ぼくはこの文字の並びを長いこと眺め続け、一体これはどういうメッセージなのだろうと考え込んだ。「あなた」とか「夢」とか「成就」とか「開運」とか「占い」とか、断片的な単語は認識できるのだが、それらがこうやって積み上がってどういう意味をなすのかがわから

ない。ここに及んで、ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳はもう働くことをやめてしまったのだ。

ぼくは内心の不安を悟られまいと、微笑みを浮かべる努力をしながら、振り向いて店員を見た。店員は職業的な笑みを満面に浮かべ、足早に近づいてきた。ぼくはこの言葉が何を意味するのか、その内容を尋ねるために、メニューの「あなたの夢が成就する！開運！！生クリーム占い2011年版」を指さして「これ……」と言いかけた。その言葉はハイテンションな店員のシャウトでさえぎられた。

「ナマクリイッチョウ、カシコマリマシータッ！」

どうやらオーダーが入ってしまっていたらしい。と、気づいた時にはもう奥から十数人ばかりの屈強な男たちが飛び出してくるところだった。厨房から出てきた男たちは、しかしおよそ料理人らしくなかった。筋骨隆々で肩幅広く、短く刈り揃えた頭髪の下には日焼けした顔、一様に白い歯を光らせている。先頭のリーダーらしき男が発する言葉に合わせて残りの十数人が一斉にはきはきした口調で唱和する。

「アナタノユメガア」

「ジョージュスルー！」

「カイウン！カイウン！」

「ナマクリムウラナーイ！」

あれよあれよという間にぼくは十数人の究極な男たちに担ぎ上げられ、胴上げされ、ワッシュイワッシュイとかけ声も勇ましく、店の外に運び出されている。街ゆく人々は男たちとぼくを遠巻きにし、面白そうにくすくすと、指さしたりして笑っている。

「ナマクリーム！」

「ナマクリーム！」

「ナマクリーム！」

「ナマクリーム！」

男たちが叫ぶと店の奥からさらに新たな二十人前後の一団が現れる。その働きっぷりはまるで消防士のように見えると思ったら、実際に長い消防ホースのようなものをみんなで引き出して、その先端をこちらに向けている。新たな一団のリーダーらしき男が叫ぶ。「撃テ！撃ッテ撃ッテ撃チマクレ！」

もちろん予想された通り、ホースの先からはおびただしい量の生クリームが噴出し、ぼくとぼくを胴上げする男たちを一瞬にして飲み込んでしまう。だれかが情けない声で悲鳴を上げている

と思っただらばよかった。ぼくはその声の哀れさに驚き、自分の声なのに同情さえしてしまった。

一事が万事、この通りである。驚嘆すべき素晴らしい左脳を失って以降、ぼくの人生はつらく困難に満ちたものになってしまったのだ。乱暴かつ屈辱的な占いは今始まったばかりで、いつ終わるとも知れない。そしてぼくにはそれを逃れる術もない。

(「あなたの夢が成就する！開運！！生クリーム占い2011年版」 ordered by たいとう-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## ぼくの驚嘆すべき素晴らしい左脳

<http://p.booklog.jp/book/46708>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46708>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46708>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.